研修報告

「障がい者虐待防止について」の研修に参加して

地域で暮らす障がいのある方が安心して生活を続けるためには、特別な誰かだけでなく、私たち一人ひとりが虐待防止について考え、支え合うことが大切です。

先日、新座市基幹相談支援センターが主催する「障がい者虐待防止を地域でつくる」をテーマにした研修に参加しました。この研修は相談支援専門員や、障がい福祉サービス事業所の職員など、さまざまな立場の支援者が集まり、虐待防止について学び合う取り組みです。

研修では、虐待は身体的な暴力だけではなく、何気ない言葉や態度、本人の気持ちを十分に聞かずに支援を進めてしまうことなど、日常の関わりの中にも潜んでいることを学びました。支援する側に悪気がなくても、本人の尊厳や意思が尊重されない状況は虐待につながる可能性があります。

虐待は決して特別な人だけが起こすものではなく、疲労や思い込み、閉鎖的な環境、相談しづらい職場など様々な要因が重なることで起こり得るもの。だからこそ一人で抱え込まず、相談支援専門員や関係機関、多職種と連携しながら支援していくことの大切さを改めて感じました。さまざまな職種の視点や考え方に触れることで、自分自身の支援をふり返る貴重な機会にもなりました。

虐待防止は特別な取り組みではなく、日ごろから利用者さんの思いに耳を傾け、尊厳を大切にした関わりを重ねることから始まります。障がいのある方が地域で安心して暮らせるように、支援者だけでなく地域全体で見守り、気づき、支え合うことが「虐待防止を地域でつくる」ことにつながるのだと感じました。

ケアサポートえん　西本由美子

ACP 研修に参加

6月 14 日、朝霞市産業文化センターで、講師に堀ノ内病院の堀越洋一先生をお招きして、医療・介護従事者向け ACP 研修に参加させていただきました。

ACP とはアドバンス・ケア・プランニング、別名「人生会議」と呼ばれています。もしもの時のために、家族や医療・ケアチームと繰り返し話し合う取り組みのことを言います。研修のグループワークでは事例を基に、医師から余命宣告を受けた夫に対して、ご本人の思い、家族(妻・息子夫婦・娘夫婦)の思いをどう汲み取り、それぞれの思いの違いをどう擦り合わせするのかを実践させて頂きました。

同じ事例でも参加者によって受け止め方(価値観)に違いがあることや、経験による知識の深さなどを知ることで、客観的に自分自身の弱点や課題に気づく機会になり、繰り返し話し合うことが大事だと学びました。不慮の事故や病気などで、意思を伝えることが困難になった場合に備えて、ご本人が大切にしていることや思い(どのような人生の最期を迎えたいのかなど)を、家族や親しい人と共有しておくことの意味を理解することができました。

ケアサポートえん／グループホームえん　立川栄侍